

ヨーロッパの多様性と演劇

2024年度「埼玉世界行き」冠奨学金

カロネコ奨学金

佐藤ことね(イギリス・デンマーク)

埼玉県をPRした事柄について

埼玉県のPRを兼ねてお土産として草加せんべいを持って行きました。ロンドンの語学学校で同じクラスだった人に配り、埼玉の話をすることで、魅力を伝えることができましたと思います。またPRというだけでなく、お互いの出身地について話すことで、なかなか知れないローカルな場所について知れるし、友達との距離が縮まるので、お土産に出身地に関するものを持つていくことはおすすめです。印象的だったのは、せんべいはベジタリアン、ヴィーガンの人も食べられるものが多いということです。私の友達はヴィーガンでしたが、草加せんべいについて彼女自身で調べた上で、美味しく食べてくれました。その後、その友達と日本食レストランに訪れましたが、彼女が食べられるメニューが数少ないことに驚きました。日本食には、沢山の肉、魚、卵などが使われており、ベジタリアン、ヴィーガンの人には不向きな食文化であると思います。また、ロンドンには、大体のレストランで専用のメニューが設けられていましたが、日本ではあまり見かけないのが現状です。そもそも該当する人口量の違いもありますが、その人たちが日本に来たら、食事するのに苦労するだろうなと思います。そんな中で、草加せんべいはその基準を満たしているため、幅広い層に受け入れられやすい日本食だと思います。日本でそういう方に会ったことがなかったので、ただ美味しいという理由で持っていきましたが、友達に草加せんべいの更なる魅力を教えてもらえました。海外には、思っている以上にヴィーガン、ベジタリアンの人が多いです。その人たちへ配慮するという意味でも、お土産に草加せんべいを持っていくことは非常におすすめです。

現地での生活、風土、文化、歴史、国民性など

イギリスには、9月初めから1月末まで約5ヶ月間の滞在をしていました。最初の1ヶ月はホームステイ、その後の4ヶ月は学校付属の寮で生活しました。最初の一ヶ月間は、寮の空きがなかったという理由でホームステイを選びましたが、実際イギリスのお家の事情が知れたり、英語が上達していない段階でどうコミュニケーションを取ったり、仲良くなればいいのか、模索しながら行動に移せたことは良い経験になり、その後の留学生活にも大きく活かせたと思います。また、ロンドンは、本当にエンタメに溢れた街で、特に演劇に関しては日本との規模の違いを強く感じました。劇場の数や演目数が桁違いですし、演劇の広告が街中にありました。観劇していて一番面白いと感じたのは、日本とイギリスでの観客のスタンスの違いを感じたことです。イギリスの観客は、演劇を見に来ているというよりは、観劇することそのものを楽しんでいると感じました。観客中に声を上げたり拍手が頻繁に起こったりと観客が感情表現をしていたりするところを見て、アトラクションのように楽しんでいるなと思いました。週末に家族・友人と映画館に行くような感覚で娯楽を楽しんでいるのだと思います。日本では、役者や作品目当てで見に行ったり、高貴な芸術鑑賞として扱われたりすることが多い印象ですが、イギリスではもっと気楽な娯楽として浸透していると感じました。イギリスに限らずですが、ヨーロッパの劇場内には必ずと言っていいほどBarがあり、観劇中にお酒やアイスを楽しんでいる人が多く、そういった環境もこの違いの一つの要因だと思います。2月からはデンマークに渡航し、パフォーマンス・アートをメインで学ぶことができるフォルケホイスコーレに約5ヶ月間滞在しました。一つの校舎に、教室、寮やキッチンが完備されており、デンマーク人の生徒とその他10カ国から集まった留学生と共に、学び、暮らしました。穏やかで、ゆとりのある時間を大切にする文化で、日本で忙しい暮らしをしていた私にとって、空白の時間を大切にという考えに触れられたのは、とても貴重な体験でした自分は将来どのように暮らしたいのか、豊かな暮らしとは何か、考えるきっかけになったからです。また、デンマークは多様性が非常に広く受け入れられている国だと思います。食生活、LGBTQ+や家庭環境のことであっ

たりとそれらは多岐に渡ります。日本であまり出会うことのなかった人、考える機会の無かったことに触れられたことは私の視野を広くするだけでなく、他人のありのままを尊重する、受け入れるということに良い意味で慣れることができたと同時に、日本社会についても考えました。例えば、日本では異性が好きだという前提が強くあると感じていて、それがカミングアウトしにくい環境を作っていると思います。デンマークでは、彼氏彼女のことをパートナーと言ったり、恋愛の話をする前に性的嗜好を質問されたりなど、多様性があるのは当たり前という考えが根付いていています。そういった素晴らしいことを、日本も今後見習っていきたいところだと思いました。

自身の活動について

イギリスでは、沢山の観劇をしました。ウエストエンドのミュージカルから小劇場まで幅広いジャンルや規模感の観劇を心がけていました。その中でも国立劇場での観劇体験は自分のクリエイティビティと鑑賞眼に大きな影響を与えました。ロンドンにある国立劇場は、世界随一のクオリティを提供できる素晴らしい劇場だと思います。デンマーク渡航後に、わざわざロンドンに行き、「Dear England」というサッカーイングランド代表の実話を元にした劇を見ました。観客はイギリス人が多く、イギリス人の母国愛がステージからも観客側にも感じられた貴重な体験でした。かつて国民が熱狂した歴史が舞台上に乗り、再現されるということに国民と演劇との強い繋がりを感じました。また、シェイクスピアの故郷であるストラスフォード・アポン・エイヴオンにお訪れ、ロイヤル・シェイクスピア劇場で「十二夜」を観劇し、シェイクスピアの生家とシェイクスピアが埋葬されている教会、シェイクスピアが通っていた学校に足を運びました。本で読んでいたシェイクスピアの境遇や生まれた時代を本物の土地で知ることができました、その後、彼にまつわる本を読んでみたところ、その時代のイメージがより掴みやすくなっていて、フィールドワークが生きたことを早速実感しています。

観劇や演劇調査が充実していたイギリス留学でしたが、デンマークでは演劇の実践に力をいれることができました。フォルケホイスコーレの授業内で学校の空き部屋を使用したイマーシブシアターのプロジェクトを計3回行いました。脚本、演出、舞台美術を自分たちでプロデュースし、演じました。11カ国からきた人々と一つの作品を作り、その過程に参加できたことは自分にとって非常に良い経験でした。そのうち2回は、英語で脚本を書き、それぞれの母国語で演技をしました。これは、濱口竜介監督の映画「ドライブマイカー」にて舞台演出家の主人公が上演していた劇と同じ演出で、私自身、この演出に興味を持っていました。ですが、いざ役者としてやってみると、相手のセリフに対して反応することが出来ないため、内容を自分に落とし込み、一つの言語で会話しているかのように演じるのが大変でした。ですが、この演出は環境が揃わないとなかなか出来ないことですし、この演出には、使っている言語や住んでいる場所が違っていても、同じ世界で同じ時間を生きているという壮大な意味を込めることができると思います。更にこの演出に興味を持ちましたし、今後グローバルな演劇を作りたいという目標も出来ました。また、創作過程において、違う環境、文化で育ってきた人と仕事をする難しさを知り、お互いが歩み寄ることが大事であるということを学びました。決められた中で出来なかったら他の時間を使って理想の形にするまでやり切るという思想が日本社会では良いとされていると思いますが、ヨーロッパの人々は、決められた時間の中で出来るだけやって、もしその中でできなかつたら、それは仕方がない考える人が多かったです。これは、やる気の問題ではなく、生活の中で、仕事とプライベートの時間を分けて、自分の時間を大切にするという考えを持っているだけなんだということに気がつきました。1回目のプロジェクトでは、考え方の違いで理由に仕事に偏りが出てしまいましたが、それ以降は互いのやり方を理解しながら進めていくことができ、将来グローバルな環境で働くときに大事なマインドセットを知ることが出来ました。



写真1：シェイクスピアが通っていた学校（イギリス）



写真2：自分たちでデザインした舞台セット（デンマーク）